

## 2018年度 大学自己点検・評価(国際学部)自己点検・評価総括用シート 1

## ＜国際学部の教育研究目標の進捗状況＞

教育研究目標(タイトル)		評価指標	評価尺度	進捗状況	
目標1	「問題発見解決能力」の養成	「ダブルチャレンジ プログラム」における3つのプログラムのうち、問題解決能力という観点から、「ハンズオン・ラーニング・プログラム」の「全学科目」および「国際学部開講科目」を履修した国際学部生の人数を指標とする。	A: 50名以上	2018年度目標値	C
			B: 35～49名	2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点)	A
目標2	「多文化共生能力」の養成	関西学院大学及び国際学部の開設する留学科目(海外インターンシップを含む)のうち、多文化共生能力の育成と深くかかわる中期以上の留学プログラムに参加する学生の延べ人数を指標とする。	A: 260名以上	2018年度目標値	C
			B: 240～259名	2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点)	A
目標3	「倫理的価値観」の養成	学部実施のチャペルアワー(日本語・英語)の延べ参加人数を指標とする。	A: 4000名以上	2018年度目標値	B
			B: 3600～3999名	2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点)	B
目標4	「言語コミュニケーション能力」の養成	学院総合企画会議の基本方針を踏まえ、学部の設定する英語力基準をTOEIC740点(英検準1級相当)に設定し、3年次に実施する TOEIC においてこの目標英語力基準に到達する学生の比率を指標とする。	A: 50%以上	2018年度目標値	B
			B: 47%以上50%未満	2018年度自己点検・評価後 (2018年度帳票提出時点)	A
			C: 44%以上47%未満		
			D: 44%未満		

## &lt;2016～2018年度の自己点検・評価の取組み総括&gt;

**総括1 <3年間の取組みによって改善したこと、向上したこと>**

理念、目的、方針については、毎年定期的に「3つのポリシー」をはじめとした本学部の基本指針を確認することが、教職員1人1人が本学部の運営方針を共有・再確認する機会となり、学部全体として足並みをそろえた教育活動を行うために欠かせないプロセスとなっている。また、個別の取組みが学部の理念、目的、方針から外れたものになっていないか、という視点を教職員個々が共有し、学部内での意識は着実に高まっている。PDCA のサイクルが学部運営に根付いてきていることは改善点といえる。

また、個別目標として掲げてきたことについても一定の成果が上がっている。

まず、「多文化共生能力の養成」として重点化した「中期以上の期間の留学参加者数」は、順調に増加しており、1学年の定員300名に対して毎年250名前後の学生を「中期以上」の留学プログラムに送り出すことができている。

また「倫理的価値観の養成」の一環として、チャペルアワー参加者の増加を図ってきた取組についても、設定した目標値を上回る実績をあげ続けている。

加えて特筆すべきは「言語コミュニケーション能力の養成」であり、本学部は評価尺度の最高値(受検者の半数以上が TOEIC740点以上)を直近2年連続で達成しており、「世界を舞台に活躍する学生を育成する」という本学部のミッションに沿った成果をあげている。

**評価専門委員・所見記入欄:****■総括1について**

- ・ 適切な総括がなされていると思います。(A)
- ・ 良好な進捗状況です。引き続き PDCA サイクルを機能させることで、更なる伸展につながることを期待します。(C)
- ・ 各目標について、当初の想定を上回る成果を挙げていることに敬意を表します。また、学部運営において教職員が理念・目的、方針を共有し、PDCAサイクルを回す文化が根付いてきている点は大いに注目される点です。(D)
- ・ 種々の取組に対する成果を適切に検証されていると考えられます。(E)
- ・ 全体として適切に自己点検及び評価が実施されていると思います。(F)
- ・ 学部で自己点検・評価のPDCAサイクルが機能している様子がうかがい知れます。大学の施策に沿った目標が着実に結果を出していることから、中期総合経営計画へのスムーズな移行が期待されます。(G)
- ・ 学部の基本指針を確認することが、学部全体としての足並みをそろえた教育活動を行うために欠かせないプロセスとなっていることや、PDCA サイクルが学部運営に根付いてきていることは、学部における自己点検・評価の取組みの大きな成果です。個別目標に関しても、成果を十分にあげていますので、今後に大きく期待します。(H)